
DOLLY

イネヤマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOLLY

【Nコード】

N3077F

【作者名】

イネヤマ

【あらすじ】

貧しくおばあさんと二人でくらすドロシーは、ある日、狐目の男に見初められ――

湿っぽい風が吹き荒ぶ気候の悪いある村で、「かわいいドロシー」は、いつも一人ぼっち。

ドロシーは、12才。

栗色の髪に青い瞳の色白のかわいい少女です。物心がついた頃からおばあさんと二人でくらしていました。年寄りと少女の二人です。から貧しく、奇麗な服や靴を買うことはおろか、食べていくことがやっとです。しかしドロシーは、文句の一つも言いませんでした。どんなに見窄らしい服や靴をあざ笑われても、ただ彼女は微笑むだけです。

おばあさんは、悲しみながら、ドロシーに言います。

「かわいい私のドロシー。」

愛おしそうに、皺だらけになった目尻に、もっと深い優しい皺を重ねてゆきます。そして、ゆっくり壊れやすいものを抱くようにそっと頬に右手をそえます。

「おばあさんの右手は、魔法みたい。とても暖かいもの。」

皺だらけで冷えやすいはずの、骨張ったおばあさんの手はこのときだけは、暖かくなります。まるで、ドロシーの悲しみを吸い取るように。それは深い愛情に満ちていました。

ある日ドロシーがいつものように、買い出しにいくと、一人の怪しげな紳士が近づいてきました。

「美しさを秘めた少女よ。どこへいく。」

紳士は狐目の細長い体躯で、真っ黒なスーツを着ていました。ニヤリと意地の悪い笑い方をしています。ドロシーは、からかわれているな、と思いながら、いつものように微笑んでみせました。

「おお、美しい。なんと美しい。」

紳士は目を奪われました。意地の悪い笑い方はかわりませんが、その瞳に揺らぎがあったのをドロシーは見逃しませんでした。何故だか気恥ずかしくなって、ドロシーは視線をそらせてしまいます。

「あと3年経ったら、私の息子の嫁になりなさい。きっと息子も喜ぶだろう。私は、あの丘の城に住んでいるので、3年後に我が家

を訪ねなさい。」

紳士が指を指した先にある丘の城は、真っ白で大きい村一番の貴族の家でした。

ドロシーは、紳士に深々と頭をさげると、すぐにおばあさんのもとに走って帰ります。買い出しのことはすっかりわすれていました。そして、ことのあらましを話したドロシーにおばあさんは、嬉しげにそしてちよっぴり悲しげに言いました。

「ああ、私のかわいいドロシー。よかったね。」

いつもとおなじように、おばあさんのあたたかい右手が、ドロシーのほほに触りました。

＊

3年後。

15才になったドロシーは、めいいっぱいのおしゃれをして、城に嫁ぐことになりました。おばあさんは連れてはいけません。丘の上の城は、おばあさんにはとうてい上ることはできませんでした。

「きつと、きつとおばあさんを城に招待するわ。そのときは、馬

車に乗って、一緒にあの丘の上の城で暮らすの。それまできつと待っていて。約束よ。」

ドロシーは、おばあさんの右手を握りしめて、言いました。
おばあさんは、にっこり笑います。

「私のかわいいドロシー。がんばるんだよ。」

笑顔で送り出されたドロシーは、やがて、丘の上の紳士の息子と結婚しました。

しかし、すぐに、おばあさんを城に招待することはできませんでした。ドロシーは、貴族と結婚したことで、村の外のもっと大きな町で開かれる晩餐会や、舞踏会に呼ばれて慌ただしい日々を過ごしていたのです。

ドロシーは、そんな日々が、嫌いではありませんでした。今まで、注目されても蔑まれることが多く、自分がこんなにも色々な人から愛されることなど予想もしていなかったものですから、それはそれは夢のような日々でした。

しかし心の片隅にはいつもおばあさんがいました。

優しい優しいおばあさん。

おばあさんの優しい右手がないと、ドロシーは不安にかられました。

まるで現実味のない世界です。

ドロシーはついに晩餐会や舞踏会から逃げ出しました。

＊

村に戻ると、まっさきにおばあさんのもとに向かいました。

馬車を降りて、玄關にはいると、そこはもぬけの空。

もうおばあさんはいません。

ドロシーが、結婚してまだ3ヶ月でした。

「私がすぐにむかえにこなかったから、どこかへ行ってしまったんだわ。どうしよう。」

ドロシーは、泣き崩れました。

このとき初めてドロシーは、目から流れる涙とあふれる悲しみと絶望を押さえられませんでした。

いつもドロシーの頬をなでていたあたたかなおばあさんの右手が、もうそこにはありません。

ドロシーは、色々な人から愛されることを知りました。

しかし、その代償としておばあさんを失いました。

これが一体ドロシーにとって、どのように大切なことだったかはわかりません。しかしそれからというもの、毎日毎日泣き崩れるドロシーは、3年前に紳士を魅了したときのような美しさは消え去ってしまいました。

それでも紳士は、彼女を見捨てませんでした。どんなに彼女が醜くなっても、ましてや、離婚することとなっても紳士は彼女を匿い、そっと見守り続けます。

「お義父様は、私をどうしたいの。」

悲痛な声が響きました。毎日優しく接する紳士の態度がいつのまにかドロシーにとって憂つと惜しいモノになっていました。

愛されることと愛されることを失うことに、もううんざりしていたのです。

「美しさを秘めた少女よ。泣かないで。ずっと側にいてあげよう。」

涙のせいか、狐目が細く歪み伸びました。不気味に思いながらも、ドロシーはそれに縋るしかありませんでした。

「泣かないで、私のかわいいドロシー。」

紳士は、歪んだ顔で、ドロシーの頬に触れました。

触れた紳士の手は、冷たく冷ややかなものでした。

（後書き）

初めての投稿なので、短編で。不思議な話が好きで、これからいくつでも想像できるようなそんなお話がかけられるようになりたいです。

「DOLLY」というタイトルは、ドロシーの愛称です。
他にも、人形などという意味もあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3077f/>

DOLLY

2010年12月4日05時12分発行